

# 行政視察等報告書

平成 30年 6月 7日

境港市議会  
議長 柗 康弘 様

会派名 新風  
代表者 浜田 佳尚



下記のとおり行政視察（調査・研修）を行ったので、その結果を報告します。

## 記

1 視察等期間	平成30年4月19日（木）～平成30年4月20日（金）
2 視察等先 及び内容	平成 30年 4月 19日（木） KOTOWA鎌倉 鶴ヶ丘会館 ① カマコンバレー定例会  平成 30年 4月 20日（金） ダイアゴナルラン東京 ② 八百万の会
3 視察等議員	浜田佳尚
4 総 経 費	合計（1名） 73,600円 （一人当たり73,600円） ※一人当たり経費に端数が出る場合は円未満切り捨て
5 所 見 等	別紙のとおり

内 容： ①カマコンバレー定例会参加

報告者：浜田佳尚

所見等：

『カマコン(カマコンバレー)』とは、企業の集積地にもなりつつ鎌倉市においてITの力を使って鎌倉を盛り上げていこうと発足した団体ですが、今やITの垣根を越えて様々な人達や企業・団体が関わっています。

毎月の定例会には、毎回約100人が集まり、毎回、鎌倉でおもしろい活動をしている人を呼んで、みんなの前でその活動内容をプレゼンしてもらい、その後自分の活動の課題を提示し、それに対して定例会に参加した人たち全員で、その課題を解決するために『ジブンゴト』として向き合い、アイデアを惜しげなく出していきます。100人でブレインストーミングするので、多くのアイデアが生み出され多くの活動・事業につながってきたそうです。

当日も、市内外から高校生から60代くらいの方が集まり、5名の方が鎌倉の課題や自身の夢をプレゼンしその解決に向けて、みんなで話し合いました。

境港市では、様々な場面で市民(特に若い方)の意見を聴こうとしているが十分な成果が出ているとは言えない状況にあります。カマコンの取り組みは、住民自治や協働の精神を育むには有効な手法と言えます。行政や議会においてもこういった手法を取り入れていくことが本市の進める「協働のまちづくり」がより推進されると考えます。

(以下に、具体的な会の進行方法と当日のプレゼン内容と意見を記載)

#### 【カマコンの流れ】

【チャレンジのプレゼン】プレゼン時間1組5分×5組

↓

【プレスタイム】参加者全員が自分が応援したいチャレンジごとに分かれ、チームになって「プレスト」を行います。前向きに、そしてとにかく数多くのアイデアを出し合います。

↓

【アイデア発表】各チームでプレストで出たアイデアの数と、アイデア1つを選んで発表

↓

【まとめと次の一歩】各チームからの発表の後は、アイデアのまとめと今後の応援案をお伝えします。すべてのチャレンジとアイデアへ、参加者全員の心からの敬意と感謝を届けます。

#### 【当日のプレゼン内容】

1) 鎌倉から登山家を！/プレゼンター：西川さん

内容：鎌倉在住で、山岳ガイドのお仕事をされている西川さん。2015年に「エベレストへ登頂する」という夢を見つけたことに端を発し、仲間が集い、「セブ

ンサミット」というグループをつくったそうです。そして、セブンサミットでは、世界七大陸最高峰の制覇を目標に掲げ、去年はアフリカ最高峰であるキリマンジャロの登頂に成功しました。そんな西川さんは、愛する山、愛する自然を守る活動を行っていくために、自らが影響力を持つ登山家になりたいと考えました。今回は、鎌倉の登山家として影響力を手に入れるためのアイデアを求めてのプレゼンでした。

#### 【プレストで出たアイデア】

出たアイデア数は26。そのうち、「ご当地セブンサミットを全国につくる」というアイデアが出されました。

### 2) ジブン2.0 当たり前をぶっ壊せ！：休場さん

内容：現在、大学生の休場さん。大学受験の際には、志望する大学へ進めず、人生で初めての挫折を経験しました。時を同じくして、弟さんがサーフィンの大会で優勝する姿に影響を受け、「自分がやりたいことは何だろう」と考えるようになったそうです。そして、「楽しく生きたい」という答えにたどり着いた休場さんは、そのとおりに、今はとても楽しい日々を送っています。そんなご自身の経験をもとに、高校生が「自分の人生をどう生きるか」を考えるサポートがしたいと思うようになり、高校生と大人が対話するイベント「ジブン2.0」の開催を企画しました。今回は、このイベントに、高校生にたくさん参加してもらうためのアイデアを求めています。

#### 【プレストで出たアイデア】

Aチーム：出たアイデア数は20。そのうち、「高校の文化祭に大人が参加し、性教育など、先生が話しにくいことを話す」というアイデアが出されました。

Bチーム：出たアイデア数は25。そのうち、「江ノ電とコラボして、江ノ電の中でイベントを行う」というアイデアが出されました。

Cチーム：出たアイデア数は28。そのうち、「(今回のPJT案5で登場する)Runtripとコラボする」というアイデアが出されました。

### 3) 腰越 haletto house の活性化／プレゼンター：三宅さん

内容：ライフスタイルメディア「haletto」のプロデューサー兼編集長を務める三宅さん。そのお仕事をされる中で、「街選びって、どうしたらいいかわからない！」と感じるようになりました。衣食のように、「住」も、もっと気楽に選んで楽しめたら…。そんな思いから、昨年10月、鎌倉・腰越に試住体験施設「haletto house」をオープンしました。「試住できる環境を増やし、街選びに失敗する人を減らしたい」「試住が当たり前の世の中にしたい」という三宅さんが掲げる目標を実現する一歩として、試住体験をしたい人に腰越のhaletto houseを利用してもらうためのアイデアを今回は求めています。

#### 【プレストで出たアイデア】

Aチーム：出たアイデア数は38。そのうち、「カマコンに地域から参加した人に、haletto houseに宿泊(二泊)してもらおう」というアイデアが出されま

した。

Bチーム：出たアイデア数は29。そのうち、「試住体験したい人に、カマコンに参加してもらう」というアイデアが出されました。

Cチーム：出たアイデア数は25。そのうち、「『帰れなパスポート』をつくる」というアイデアが出されました。

#### 4) 鎌倉てらこや 新しいステージへ/プレゼンター：橋本さん

内容：地域総がかりの教育プロジェクトである「鎌倉てらこや」。そのメンバーとして活動する、大学生の橋本さんによると、鎌倉てらこやでは、学童保育への学生の派遣や鎌倉を味わう体験、お寺での合宿など、年間700回もの活動を実施しているそうです。それら活動の分、費用が必要となり、現在は助成金でまかなっているそうですが、今後は、自力で稼ぐ財務モデルに転換したいと考えています。現在、400万円の財務不足がある中、鎌倉てらこやで活動する大学生200名が、鎌倉の子供たちのために、この400万円を稼ぐためのアイデアを求めています。

##### 【プレストで出たアイデア】

Aチーム：出たアイデア数は14。そのうち、「鎌倉ユーチューバーを育てて稼ぐ」というアイデアが出されました。

Bチーム：出たアイデア数は28。そのうち、「おじいさん、おばあさんからお金もらって、子どもたちが肩たたきをする」というアイデアが出されました。

Cチーム：出たアイデア数は27。そのうち、「鎌倉てらこやブランドで、様々な商品をつくって販売する」というアイデアが出されました

#### 5) 鎌倉をスポーツフルな街へ/プレゼンター：大森さん

内容：学生時代に、箱根駅伝に出場した経験を持つ大森さん。しかし、その長距離を走る経験は「つらい」「楽しくない」ものだったそうです。そこで、もっと自由に楽しく走れる世界をつくりたいと考え、それを実現するアプリなどを開発する「Runtrip」という会社を創業しました。このRuntripの専用アプリを片手に、「コースは自由。ゴールで乾杯」というコンセプトで、競争が生まれにくいランニングイベント「Runtrip Via」も開催しています。このRuntrip Viaを今後鎌倉でも開催したいと考える中、今回のプレゼンでは、地域の人々が地域のためにこのイベントを開催したくなるアイデアを求めています。

##### 【プレストで出たアイデア】

Aチーム：出たアイデア数は15。そのうち、「地元の飲食店に協力してもらって、パン食い競走を開催する」というアイデアが出されました。

Bチーム：出たアイデア数は20。そのうち、「鎌倉のお寺に協力をしてもらって、『坊主駅伝』を開催する」というアイデアが出されました。

Cチーム：出たアイデア数は33。そのうち、「鎌倉てらこやが主催し、400万円稼

ぐまでイベントを行う」というアイデアが出されました。

内容：②八百万の会参加

報告者：浜田佳尚

所見等：

前日のカマコンバレー定例会に続き八百万の会に参加しました。八百万の会とはカマコンバレーの手法を全国で実践する仲間達のグループであり、実施する中での知恵を共有し、お互いの活動を発展させるための団体です。

今回の会では、全国15カ所から参加者が集まりました。参加団体は、カマコンのように毎月定例会を開いているところや、開催回数に制限をかけていたり、あるいはこれから開催したいと考えているところ等、様々なスタンスで活動していました。中には、九州から参加され「手法を持ち帰り学生の地域参画意識を高めたい」という大学関係者もいらっしゃいました。

会では、それぞれの団体の活動報告や課題などを共有し、その課題に対してみんなアイデア出しを行い課題の解決を図ったり、カマコンバレーを題材に論文を書かれた大学教授の発表の場が設けられる等して情報の共有や協力体制の構築が行われていました。

八百万の会の参加者は、それぞれの住んでいる地域の課題の解決のために他の地域の方がアイデアを出したり、わざわざその地に足を運んで直接関わったりを無償で行っています。自治体や地域の枠に収まらず、そういったコミュニティーを楽しみながら育んでいます。

本市は、周辺の自治体とともに連携をとりまちづくりを進めています。しかし、住民レベルでの連携は出来ているといえるでしょうか。今後、人口減少が進んでいくにあたり行政レベルだけでなく民間・住民レベルでの連携は様々な場面で必要になってくると考えられます。カマコンバレーの手法は協働の町づくりを推進させると前述しましたが、更に横との情報共有をはかり連携を強化していくことは町を飛び越え、国作りにも結びつくものと言えます。これから地方が元気になるには、押しつけや責任ではなく、住民が様々なことを「ジブンゴト」として楽しんで参画できる仕組みを実践していく必要があります。